

Graphic Designer

Hitomi Aso - 阿曾ひとみ

看護師資格を持つグラフィックデザイナー

熊本の田舎の中学生だった頃から、ポパイやオリーブなどマガジンハウス系の雑誌を見るのが大好きでグラフィックデザインに興味を持つ。デザインなどを学べる高校に進学。

高3の時、突如看護師になろうと決意する。看護師をやりながら、たまに頼まれて、ショップカードやポスターデザインなどを請け負う。看護師としてのスキルアップを目指し上京、都内大学病院に勤務。社畜看護師を極めた頃、結婚。ひよんな事から自営の夫にデザインの仕事を任せられるようになり、独学でデザインソフトの扱いを覚え、言われるままカラーコーディネーター1級を取得。

よきクライアントさん達に恵まれ、気づけば看護師歴(デザイナー歴)になっていた。世の中って何がおこるか分からないものだ。

message to BUILD

ひかりの小さな亡骸が火葬場の大きな黒いトンネルに連れて行かれそうになった時、私は本気で一緒に焼かれて死のうと思った。「小さなあの子を、たったひとり行かせられない」母親としての本能だったのかもしれない。でも、小学生の長女を置いては行けない。それもまた本能的なものだった。「ごめんね。」何度も謝りながら見ていられずぎゅっと目をつぶった。そんな経験を経ても、生きてると他人のふりかざした正義に傷ついたり、些細な事に嘆いたり怒ったり。辛いなぁって思ったり。ふと、あの狂ってしまいそうだった感情に比べたら小さな事じゃないの！それでも私はこんな事に痛みを感じるのかと可笑しくなる。だけど、痛いもんは痛いのだ。小さくても、今感じる感情の方が今は痛い。感情は過去の記憶となり、また新しい感情が産まれていく。

心臓に絶望的な障がいを抱えボロボロになって、それでもありとあらゆるものを使って変容させ、生きていくために命を繋いでいたひかりの姿を思う。彼女は私に生きるという事を教えてくれた。私にとっての BUILD とは生命を繋ぎ、日々を更新し続けていく事だ。

BUILD 展の構想を聞かされた時、正直なんで亡くなって何年も経つ今なんだろうと思った。だけどこの数ヶ月作品に触れるうちに、この人は今やっとなの日の感情を表現出来るところまで消化できたのかなと腑に落ちた。ここからまた写真という手段を使って、心の風景を切り取り日々を更新していくのだろう。

最後に、長い時間をかけて一緒に BUILD 展を作り上げてくださった、クリエイターの皆様へ感謝申し上げます。それぞれのアイデアから生まれる化学反応でひとつの展示がかたちになる感覚が最高に楽しかったです。

< 追伸 >

ひかりが亡くなった後、せめて素敵な花をお供えしてあげたいとの思いからフラワーアレンジメントを習い始めました。花に触れる時間は無心になれ、その時間は私の救いのひとつでもあります。今回、会場の一角に BUILD をテーマにアレンジを作りました。見ていただけると嬉しいです。